

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：32604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02037

研究課題名(和文) 近世中国におけるムスリムの問答体文献の研究

研究課題名(英文) Study on Muslim dialogic writings in Early Modern China

研究代表者

佐藤 実 (SATO, Minoru)

大妻女子大学・比較文化学部・教授

研究者番号：70447671

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では中国ムスリム哲学者、王岱輿の弟子達がまとめた問答集『希真正答』の特徴を検討した。『希真正答』において、王岱輿はムスリム以外に道教徒、仏教徒、そして儒者達と問答を行っている。ムスリムとの問答ではイスラームの教義に関するもの以外に、身の回りにおける自然科学分野に関するものもあった。一方、相手が非ムスリムの場合は王岱輿に説得、納得させられる形になっている。まとめた弟子達によれば、ムスリムは問答によって人間的な成長をするという考え方があり、『希真正答』は文字ではなく問答によって真の知を追い求めようとした書であるといえる。

研究成果の概要(英文)：This study investigates attributes of a dialogic writing 'Xizhen zhengda' which was summarized by disciples of a Chinese Muslim philosopher, Wang Daiyu. Apart from Muslims, Wang Daiyu had discussions with Taoists, Buddhists, and Confucianists in 'Xizhen zhengda'. There were discussions not only about Islam doctrines, but also about their surrounding Natural sciences with Muslims. On the other hand, when the person is a non-Muslim, it took a style that they are convinced and agreed to Wang Daiyu. According to the disciples who summarized it, there is a way of thinking that Muslims will be matured through dialogues. 'Xizhen zhengda' can be said a writing that pursued a genuine wisdom by dialogues, not by letters.

研究分野：中国思想史

キーワード：中国 イスラーム 王岱輿 希真正答 問答

## 1. 研究開始当初の背景

中国において王岱輿(1590年頃—1657年頃)の思想研究は散発的に行われてきたが、体系的な研究としては、中国イスラーム研究の大家である金宜久の『王岱輿思想研究』(民族出版社、2008年)が代表として挙げられる。ただしそこでも『希真正答』に関する議論はほとんどなく、概要の紹介がされるだけで、あまつさえ『希真正答』の後に二人の弟子がそれぞれ付した「附録」「剩語」と題される問答集については学術的価値が劣るとして等閑視されている。

海外では王岱輿について、特に S.Murata, *Chinese Gleams of Sufi Light: Wang Taiyu's Great Learning of the Pure and Real and Liu Chih's Displaying the Concealment of the Real Realm*, Albany: State University of New York Press, 2000 が王岱輿の『清真大学』を英訳しているが、『希真正答』については検討がなされていない。

一方、日本におけるイスラーム研究では、王岱輿については堀池信夫の『中国イスラーム哲学の形成—王岱輿研究』(人文書院、2013年)が挙げられるが、該書も『正教真詮』と『清真大学』の分析が中心となっていて、『希真正答』について言及はあるものの、議論の俎上にのぼっているとは言いがたい。

## 2. 研究の目的

本研究では、漢語を母語とするムスリム知識人(いわゆる回儒)が儒者、道教徒、仏僧などとの問答を記した問答体文献の具体的な内容の検討・分析を通じて、ムスリムの儒教、仏教、道教といった中国伝統思想に対する考え方を抽出し、中国イスラームの特質の一端を明らかにする。その際に、これまで研究代表者が研究対象としてきた中国イスラーム漢籍との関係を重視して常に参照しながら考察する。最終的な目標は、中国ムスリムのアイデンティティーを考える上での新たな視座を提供することにある。

明朝に来華したイエズス会士達がキリスト教の教義を理解させるために著した文献において、たとえば『天主実義』などがそうであるように、問答体によって書かれたものがある。同様に明末以降のムスリムたちも、自身が信じるイスラームの教義を闡明するために問答体という手法を用いることがあった。そうした一連の問答体文献を検討することで、近世におけるムスリムの特徴を浮き彫りにすることが本研究の目的である。そのために今回、主として分析対象にするのは王岱輿の弟子がまとめた師の語録『希真正答』である。

『希真正答』の特徴は王岱輿と問答をする相手が、ムスリム以外に道教徒、仏僧さらには郷紳を初めとする儒者といった中国の伝統的思想を網羅する人物であるというこ

とにある。これらを整理することで、イスラームと諸家との実際の交流あるいは交渉が浮き彫りになることが見込まれるのみならず、研究代表者がこれまで検討してきた「釈疑(イスラームに向けられた疑いを釈く)」言説も問答体であることを考慮すれば、問答体という視点から回儒文献を議論することができると思う。

また『希真正答』が伝えるイスラームと儒仏道との対話を検討することは、歴史的あるいは思想史的に重要な課題であるばかりか、現代において、我々をとりまく国際社会(もちろん国内社会においても)が宗教対話を無視できないことを併せ考えると、極めて意義のある研究課題であると思う。

## 3. 研究の方法

まず研究対象である王岱輿の著作(『希真正答』『正教真詮』『清真大学』)の版本を国内外に広く収集し、電子テキスト化し、『希真正答』については更に校訂作業を行う。この作業によって『希真正答』のテキストを確定する。

テキスト確定後に『希真正答』の内容の分析を行ない、イスラームからみた儒仏道像と、逆に儒仏道からみたイスラーム像を具体的に検討する。その上で『希真正答』の本文の後に付された「附録」「剩語」を、王岱輿の思想を後世に受けつぐものとしてその特徴をおさえ、三者の関係を明らかにしたい。特に仏僧との議論が集中的になされているので、仏教思想との関連を注視する。

問答体文献として、馬注(1640年頃—1711年)『清真指南』巻6・問答や金天柱『清真釈疑』、唐晋徽(1820年頃—1900年)『清真釈疑補輯』などとの比較によって、問答体文献としての特徴も検討したい。

また現在の中国におけるムスリムコミュニティを訪問し、『希真正答』など王岱輿の著作の所蔵状況や版本について調査するとともに、『希真正答』をはじめとする問答体文献にたいする評価について聞き取りを行う。歴史的な過去となった著述であるため、現代中国におけるムスリムの率直な意見の収集が期待される。

## 4. 研究成果

本研究では中国ムスリム哲学者、王岱輿の弟子達によってまとめられた問答集『希真正答』を俎上にのぼし、その特徴を検討した。

まず『希真正答』の特徴は王岱輿と問答をする相手が、ムスリム以外に道教徒、仏僧さらには儒学を修めた郷紳といった中国の伝統的思想を網羅する人物であるところにある。ただし仔細に見ると、『希真正答』の内部で特徴を異にすることがわかる。『希真正答』は『希真正答』の本体(全61条)と「附録」(全21条)、「剩語」(全46条)に分かれる。『希真正答』本体と「附録」は弟子

の伍連城が編纂したのに対し、「剩語」は丁彦という弟子がまとめている。丁彦は王岱輿の代表的著作である『正教真詮』に序文を書いていて、王岱輿に近い弟子であったことがわかる。『希真正答』本体には儒仏道そしてイスラームの各教派の質問者が登場するのにたいし、「附録」では一つのみ質問者が仏僧であることがわかるものを除き、全てが「客問」となっていて、その客が信奉する教えについては明記されていない。ただし「客問」の中で1箇所だけ「貴教」と呼びかける例があるので、それ以外は同じムスリムからの質問であろうと考えられる。それに対し「剩語」は仏僧との対話に特化しており、基本的には仏教を論駁する形になっている。それは「剩語」の冒頭部分に「正教と佛と、甘草、甘遂の相い入れざるが若(ごと)し」とあるように、イスラームと仏教をそれぞれ、痛み止めとして一般に広く使用される甘草と、毒性の強い下剤として使用される甘遂になぞらえているところから、王岱輿の仏教に対する強い敵対心がみてとれる。したがって『希真正答』は儒仏道の三教とイスラームからの全般的な問答集であるのに対し、「附録」はムスリムとの、「剩語」は仏教徒とのそれぞれ問答集となっているといえる。

さらに客の受け答えの描写にも特徴が見られた。『希真正答』と「剩語」では「客沈思云」「客不能答」「僧無言」「僧泣拜而去」といった客の言いよどみや返答に窮する様子が表現されていて、回答者である王岱輿に説得、納得させられる形になっている。これはムスリムとの対話を中心とした「附録」には当然ながら見られない特徴である。では、その「附録」の特徴はというと、日常生活において見つけられる疑問や自然科学分野に関する質問が多いことである。たとえば日の出時と南中時で太陽の見た目の大きさが違うのはなぜか(第1条)、ニワトリが先か卵が先か、あるいは鑄鉄のために使われる金ばさみと金槌とはどちらが先か(第2条)、風は音はするが、形は見えないのに対し、雲などの気は目に見える形があるが音はしないのはなぜか(第3条)、なぜ川は東に流れるのか(第14条)、星は何に懸かっているのか(第15条)、石皮(石韋)はどうして水に入れると乾き、出すと湿り気を帯びるのか、ウド(独活)はなぜ風があつて動かず、風がないと揺れるのか(第16条)などとイスラームとは無関係な質問が掲載されている。これは「物に格(いた)りて知を致(いた)し、既に以て心を明らかにし性を見るべし」(第16条)と客に言わせているように、格物致知つまり個別の事物に関する知識を集積していくことで知の明証性が増していくという朱熹のテーゼを踏まえつつ、その知の明証性の果てに人の心や人の本来的な性質を認識していくという仏教的な思想をあわせた考え方がベースにあるからではないか。つまり、一見イスラームとは無関係に思える事物

に関する質問も(あるいはそうした質問こそが)、宗教的修養につながると考えているのである。モスクを中心とするコミュニティ内のムスリム達が、知識人としての王岱輿に日常において気づく疑問について質問したものが、「附録」にはその一部として収録されており、当時の雰囲気伝える貴重なものといえよう。

また問答という形式の意味を考えるに、「又序」が引用する「経に云わく、正道は種子の如く、問答は滋生の若(ごと)し」とあるように、ムスリムとしては問答によって成長していくという思考が基本にある。そしてその考え方はまさに「又序」が冒頭で引用する『論語』雍也篇「夫れ仁者は、己れ立たんと欲して人を立て、己れ達せんと欲して人を達す」に接続する。つまり自己が立ち到達するためには人を立たせて到達させねばならない。この孔子の言葉を体現するのが本書『希真正答』である、と「又序」はいう。こうした「立人……達人」のために問答が求められたのである。『論語』がそもそも問答を含む対話集であった。そして、「時の土、唯だ文字に泥(なず)み、真知に務めず」(「又序」)とあるように、当代の士大夫が書物の文字面に拘泥して、真の知を追究しないという状況に対し、文字ではなく問答(結果的にはその問答を文字化したものを読むことになるとはいえ)という形式によって真の知を追い求めようとしたといえる。

またもう一点、問答として記録する意味を考える上で参考になるのが、王岱輿の著『正教真詮』に掲載されたいくつかの序のうち、「問答紀言」と名づけられた序文である。この「問答紀言」は『正教真詮』の執筆終了後、本書を読んでもらった者からの三つの質問に対して答えたものである。三つの質問とは、イスラーム以外の学説を引きあいに出したのでは論敵を作ってしまうのではないのか、道教と仏教はともかく、儒教の特に性理学に対する精緻な議論は行われていないのではないのか、仏教と道教を批判しているのに、彼らのテクニカルタームを使用しているのでは彼らの学派にとりこまれているのではないのか、というものである。いずれも他教との関係性の問題である。王岱輿はそれぞれの質問に対して答えていくのだが、最終的にはイスラームの道なるものがはっきりと示すことができればいいのであって、「烏(いづく)んぞ能く人の信を尽くして之れに従うを望まんや」つまり人がイスラームを信じて従うことを企図しているのではないという。それにもかかわらず、この三つの質問とそれに対する答えをわざわざ掲載したのはなぜか。やはり質問に対して答えることがイスラームについて理解してもらおう捷徑であると王岱輿が考えたからであろう。そしてその質問が儒仏道の三教との関係性についてであるということは、いわば他者に対してイスラームの輪郭を明瞭にさせていくことができる

のは儒仏道との問答においてであり、それゆえ『希真正答』においても常に三教を意識しながら問答が展開されていったと考えられる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

佐藤 実 (SATO, Minoru)

大妻女子大学・比較文化学部・教授

研究者番号：70447671

研究者番号：

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

( )

研究者番号：

(4)研究協力者

( )